

パネルディスカッション



テーマ

持続可能(サステナブル)な林業って何なん?



パネルディスカッション コーディネーター

駿河台大学 副学長／一般社団法人里山こらぼ 代表理事 ^{ひらい じゅんこ} 平井 純子氏

大学卒業後、都内私立中学校の地歴科教員。第一子出産後大学院へ進学。博士後期課程満期修了。退学後、北海道知床で財団職員として世界自然遺産での環境保全や環境教育、その発信に携わる。2009年大学就任後、飯能市エコツーリズムの推進に尽力、2014～2020年は飯能市エコツーリズム推進協議会会長として活動した。2014年より埼玉県中山間ふるさと支援隊事業で学生とともに古民家活用、子どもキャンプのプログラム醸成を実施、アウトドア人材育成に関わる。2020年から1年間フィンランド・オウル大学客員教授として、持続可能な観光、環境教育について研究。現在、授業科目「森林文化」で行政、地域住民とともに学内の里山をフィールドにマウンテンバイクのルートづくり等、多様なステークホルダーの参画による里山の利活用に取り組む。里山こらぼでは放課後児童クラブの運営を受託、北欧のエッセンスを取り入れたクラブ運営を実践しつつ、里山資源を活用したエコツアーの企画運営に楽しみながら取り組んでいる。



パネルディスカッション パネリスト

株式会社 FOREST COLLEGE 代表取締役 ^{たかはし あきお} 高橋 昭夫氏

株式会社FOREST COLLEGE代表取締役。ログビルダー・教育者。元々教師として教育の現場に立っていたが、自然とともにある暮らしの価値を伝えたいと強く思い、ログビルダーとしての道を選んだ。誰も足を踏み入れなかった埼玉県寄居町の山に分け入り、木を倒し、道を作り、伐った丸太を組み、自らの手でログハウスを建ててきた。現在は、林業技術者の育成や森林教育、ログハウス建築を通して、人と森の持続可能な関係を築く取り組みを続けている。脊髄性筋萎縮症という難病とともに生きているが、林業労働災害を一つでも減らし、志ある若者を育て続けたいという覚悟を持って研修指導を行っている。林業を「仕事」としてだけではなく、「人生の道」として歩んでもらうため、研修では技術指導に加え、現場で生きるための安全知識、就職後の悩みにも向き合うキャリア支援も行っている。育てたい人材は「森の継ぎ人」であり、命ある限り、言葉ではなく行動で、林業の未来を語り続けていくという思いを持っている。



パネルディスカッション

パネリスト

株式会社ウディーコイケ 常務取締役 小池 啓友氏

埼玉県秩父市出身。大学進学とともに東京に移住し、就職も都内の紳士服販売会社に勤める。令和3年に家業である株式会社ウディーコイケを継ぐべく秩父市に戻り、同年9月に常務取締役に就任。同社は森林所有者の調査から、森林経営計画策定、植林、育林、伐採、製材、住宅資材のプレカットや造作加工など、林業・木材産業の川上から川下に至るまで、自社で一気通貫して行っている。常務取締役就任後、同社の林業部門である「山林部」の強化をはかり、埼玉県内はもちろんのこと都内在住者のリクルート活動も積極的に行う。林業の過酷さや社会的意義、製材やプレカット加工の奥深さを伝えるべく、取引先工務店やゼネコン、自治体、地域の経済団体、教育機関等あらゆる団体の視察を受け入れ「伐採見学ツアー」と銘打ち、啓発活動を行っている。

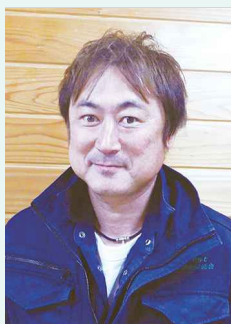


パネルディスカッション

パネリスト

合同会社西川 Rafters 代表社員 若林 知伸氏

埼玉県さいたま市出身。森林施業プランナー、准木材コーディネーター。メーカー研究開発職に従事後、岐阜県立森林文化アカデミーに入学。木工専攻に所属しつつ、地域の木材流通に興味を持つ。出身の埼玉県で就職先を探していた際に、井上淳治氏に出会い、西川林業地域に興味を持つ。卒業後、西川広域森林組合に入組し業務課に配属。2022年3月に同組合を退職し、同年7月に西川Raftersを地域の若手と共に立上げ、現職。森林整備だけでなく空間利用を行うことで、森とまちを繋いでいくことを目指す。



パネルディスカッション

パネリスト

秩父広域森林組合 森づくり推進第二課長 兼 木材センター所長 門平 宗久氏

埼玉県秩父郡皆野町出身。埼玉県立秩父農工高等学校 森林科学科 卒業。平成11年10月、秩父木材センター協同組合に入組。平成14年10月に秩父郡市の単位組合の広域合併により秩父広域森林組合へ運営委託。平成17年4月に秩父広域森林組合が木材センター業務を継承し、現在森づくり推進第二課長兼木材センター所長として業務を邁進している。森づくり推進第二課では搬出間伐や皆伐及び特殊伐採（支障木等）による搬出班の工程管理に努め、素材の出荷数量管理を行っている。木材センターでは県産材の販路拡大のため、web入札を始め、県内外の買受者拡充を図り、有利販売を実現し、組合員への利益還元に努めている。



パネルディスカッション

パネリスト

株式会社森田建設緑化 緑環境事業部 福永 果林氏

神奈川県川崎市出身。日本大学生物資源科学部森林資源科学科を卒業後、伐採・加工・利用・植林と、一連の管理・工事に携われる株式会社森田建設緑化に就職。初の女性社員ということもあり女性が少ない環境に置かれてながらも、必死に周りについていけるように日々奮闘する。8年目となる現在は2人の女性社員とともに、チェーンソー伐倒、重機作業などの生産業務、市内公共施設・公園の管理業務や工事監督など幅広く従事。2歳の子供とも8月に第二子の出産を控えている母親でもある身として、ICT技術を活用した林業業務の効率化や情報共有システムを活用した全体業務の効率化を進めている。現在の目標は樹病学を学修し診断・治療の経験を積み、樹木医として会社に貢献することである。



パネルディスカッション

パネリスト

株式会社森田建設緑化 緑環境事業部 吉野 薫氏

埼玉県飯能市出身。小さい頃から西川材を使用した家に住み、今の時代で言う“木育”のような環境のもと飯能河原や天覧山で遊び育つ。社会人になり人の心を動かすものは旅だと思い、旅行会社に就職。自らも各地を旅行するうちに、沖縄に魅了され住んでみたいと思うようになる。25歳で初めて飯能を離れ、その後9年間、沖縄の島々をめぐる暮らし。6年前に飯能に戻ってきた際、西川材を使用し姿を変えた駅や街並みに「帰ってきた安心感」をもらい改めて木のぬくもりに惹かれる。そして木に関わる仕事がしたいと思い、森田建設緑化に就職。現在、経験5年目。夏場は主に公共・民間施設の年間植栽管理、冬場は山での伐採作業や施設や個人宅等の伐採を行う。

平井

はい。改めまして、皆様こんにちは。パネルディスカッションを始めさせていただきます。本日コーディネーターを務めさせていただきます、駿河台大学の平井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、それぞれ自己紹介をさせていただきたいと思っています。1人2分程度でお話しさせていただこうと思っているので、皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

では、私からさせていただきます。

平井純子って何者、何なんっていうところからお話しさせていただきたいと思うんですけども、駿河台大学で副学長、学生支援担当、スポーツ科学部の教授ということで、サステナブル・ツーリズムですとか環境教育、あとウェルビーイングということを研究しております。

ウェルビーイングということなんですけれども、後ほども出てきますけれども、福学長、何か副えられるのが嫌なんでこの字を使っていきたいなと。福学長ということで。少し笑っていただく場なんですけれども。よろしくお願いします。

そして、これと共に一般社団法人の里山こらぼというのをやっていて、代表理事。こちらでは、エコツアーの企画運営ですとか放課後児童クラブの運営なんかをさせていただきます。

具体的には、何か遊んでいるみたいですが、授業で里山整備をマウンテンバイクの人とさせていただいたり、学生と一緒にキャンプ形式のエコツアーを実施したり、漁協さんと一緒にブラックバスの駆除をさせていただいたり、あとはもともと知床にいたということもありますので、授業で環境リーダー育成ということでキャンプをしたり、あとはフィンランドに1年ほど滞在させていただいていたので、料理が好きなのでフィンランド料理教室をやったり、放課後児童クラブの運営の中では地産地消の、地元のおいしい食材を使わせていただいて、そういうのを子どもたちに小さい頃から知っていただく、こんなことを意識してやっております。

目標としては、みんながウェルビーイングであるためにというのを考えております。ウェルビーイングは、単に幸せっていうだけじゃなくて、精神的にも身体的にも社会的にも満たされた状態、今、いろいろなところで言われていると思います。SDGs の次に来る概念と言われていると思います。ここを目指して、頑張っていこう



平井 氏

としているところです。

ありがとうございます、以上です。

では、引き続きまして高橋様、よろしくお願いいたします。

高橋

皆さん、こんにちは。埼玉県寄居町から、林業職業訓練校を行っています株式会社 FOREST COLLEGE の高橋昭夫です。

私はもともと小学校教員として人生をスタートし、その後カナダ・ケロウナでログハウスを学び、ログビルダーとして森に戻ってきました。2011年に厚生労働省職業訓練校を立ち上げ、以来、求職者支援訓練、埼玉県職業訓練センター、埼玉県林業技術者育成研修、安全衛生教育で、これまで延べ5,000名以上の人たちに命を守る安全教育を伝えてきました。

私自身、今は脊髄性筋萎縮症という難病を抱えています。動ける範囲は年々限られてきましたが、それでも林業災害を1件でも減らしたいという思いはますます強くなりました。体が動けなくなっても、声と知恵を使い、命を守る林業技術を伝え続けていきたいと思っています。

今回、会場では、未完成ながら次世代の伐倒練習機 ForesterX のパネル展示を行っています。これは、未来の林業教育をより安全に、より効果的に進めるための、私たちの夢の種です。VR、MR 技術を使ったこの仕組みは、まさに林業 DX、林業のデジタル変革の一端を担うものです。

私は、林業とは森を守る人を育てることだと思っています。どれだけ技術を伝えても、現場で定着しなければ夢半ばで終わってしまいます。だからこそ、私は研修の中に職場でのコミュニケーションやキャリアコ

ンサルティングも取り入れ、就職してからも継続的に見守る体制をつくっています。

森と人をつなぎ、明日を育てるために、本日はよろしくお願いいたします。

平井

高橋さん、どうもありがとうございました。

では、引き続き小池さん、どうぞよろしくお願いいたします。

小池

皆様、改めましてこんにちは。私は株式会社ウッディーコイケ常務取締役の小池啓友と申します。埼玉県秩父市にある株式会社ウッディーコイケの4代目です。現在33歳になります。大学進学後は都内に住んでおりまして、その後、林業とは全く関係のないスーツを販売する仕事をしておりまして、コロナ禍にウッディーコイケを継ぐべく、秩父市に戻ってまいりました。

当社は明治44年創業、今年で114年を迎える企業でございます。従業員は159名。本日、ちなみに後ろのほうに弊社の社員が5人ほど来ております。新入社員が来ております。市内4カ所の工場に分かれまして、製材業、プレカット業をなりわいとしております。

自社の製材で使う丸太が、年々手に入らなくなるのではないかという危機感の下、10年ほど前から山林部という林業部門の拡大に力を入れておりまして、20代から40代の若手を中心に約18名が林業職の正社員として活動しています。

当社の強みは、川上から川下まで一貫体制を実現していることです。森林の調査、所有者の確認、施業集約化、森林経営計画の策定、植林、育林、伐採、丸太の選別、製材、プレカットや造作加工まで、自社で一貫して行うことができます。実は、明日の全国植樹祭で天皇陛下がお立ちになるステージ、御野立所は弊社でプレカットさせていただきました。

当社の取組としては、たくさん写真がございますが、このようなものが挙げられます。全国でも希少になってきた架線集材の技術を若手に継承したり、県内では2工場しかない機械等級区分、横架材のJASを取得したり、大手企業と埼玉県森林（もり）づくり協定を結ぶなど、異業種や自治体との連携をして森林施業を行っていたり、企業研修や学生、一般向けに林業や木材産業の過酷さ、苦勞、意義を伝える伐採見学ツアーや工場見学ツアーを行っております。

30代の若輩者で、全国から集まった林業関係者のお歴々の皆様を前にして大変緊張しております。本日はよろしくお願いいたします。

平井

ありがとうございました。

では、続けて若林さん、よろしくお願いいたします。

若林

皆さん、こんにちは。西川 Rafters の若林と申します。よろしくお願いいたします。

私は、埼玉県さいたま市の出身で、最初メーカーに就職しておりました。その後、ちょっと木工をやりたいと思ひまして、岐阜県立森林文化アカデミーというところに入學しました。そこで木工を學んで、その後、森のことをやりたいなと思ひて、地元が埼玉なので埼玉県でやりたいなと思ひていたところに、西川広域森林組合という、飯能市にある森林組合にご縁をいただきまして就職しました。

そこで働いた後、右上に写真がある仲間たち3人で西川 Rafters という会社を立ち上げて今に至ります。写真の左側の井上と、右側の茂木という者の3人で西川 Rafters という会社をやっています。

西川 Rafters は、地域の森を活かしきり、人々の生き方を豊かにするということをミッションに掲げて事業を行っています。主な事業として、森側と街側の両方に向けて事業をやっております。森側のほうは、森林所有者への相談対応であったり、森林整備事業の管理業務といったことや、街側に向けては木材の流通を知ることができる研修のコーディネーターであったり、オーダーの木育講座、木製品の販売などを行っております。

具体的には、例えば左側、森林所有者への相談対応というもので、山のお悩み相談会というようなことをやっていたりします。来月も、6月14日にやろうと計画しております。また、右側は「もくわく」という商品ですけれども、こちらは全国各地で同じ規格、同じサイズで同じ商品を販売しているんですけれども、それぞれの地域の地域材を使って同じ製品を販売するというような取組です。私たちもそれに加わって、この「もくわく」という商品を西川材で作って販売しております。

以上、ありがとうございます。

平井

ありがとうございました。

続けて門平さん、お願いいたします。

門平

改めて、皆さんこんにちは。秩父広域森林組合の門平と申します。大勢の人の前で話すのは慣れていないので、聞きづらい点があってもお許しください。

出身は秩父郡皆野町で、秩父音頭発祥の地で、春には桜、梅雨にはアジサイなどが有名な美の山公園のある皆野町出身です。秩父には日本三大曳山祭りである秩父夜祭があります。私は歴史と文化を継承するために、屋台・笠鉦6基あるうちの1つ、本町屋台で運行に携わっています。ぜひ、12月2日、3日に行われる秩父夜祭を見学に来てください。

私が林業と出会ったのは、高校生のときです。高校は地元、秩父農工高等学校で、埼玉県に唯一林業科がある高校で学びました。高校卒業後は林業とは違う建設業に進みましたが、その後、縁あって秩父木材センター協同組合で働くことになりました。秩父木材センター協同組合では、素材の選別から始まり、木材生産作業まで1人で行っていました。平成17年に秩父広域森林組合に事業を継承され、現在に至ります。

現在の仕事としましては、主に木材センター事業・皆伐・搬出間伐・支障木・国有林事業や後継者の育成などを担当しています。効率的な事業実施のために、施業の集約化・団地化を進め、森林経営計画の作成を

行い、高性能林業機械などを使用してコストの削減に努めています。

題材にある持続可能な林業についてですが、当組合も技能職員の平均年齢が47.2歳で、10代・20代が5人しかいなく、今後の組合存続も心配なのが現状です。

話はまとまりませんが、本日はよろしくお願いいたします。

平井

ありがとうございます。

ではラストバッター、森田緑化の福永さんと吉野さん、お願いいたします。

福永

皆さん、こんにちは。森田建設緑化の福永果林です。出身は、皆さんと違って神奈川県川崎市出身で、日本大学生物資源科学部の森林資源科学科を卒業後、伐採・加工・利用・植林と一連の管理、工事に携われる森田建設緑化に就職しました。現在、8年目となります。2歳と、8月に出産を控えている母親の身として、仕事や母親業に振り回されながら日々奮闘しております。

ちょっと今日、妊娠7か月でお腹がちょっと大きくなってきているので、足が閉じづらいのでちょっと開かせていただきます。すいません、よろしくお願いいたします。

吉野

同じく、森田建設緑化の吉野薫と申します。私は小さい頃から西川材を使用した家で育ったこともありまして、木に触れる機会がとても多く、またここ飯能が地元で、飯能河原や天覧山で育った飯能っ子です。社会人になってからは旅行会社に就職をしまして、その影響もあり、元から興味のあった沖縄に勢いで移住をしてしまい、その後9年間、島々を移動しながら暮らしていました。

今から6年前に飯能に戻ってきまして、その際に飯能駅ですとか町並みが西川材を使用した姿に大きく変わっていて、とても驚き、うれしく思いました。その際に、帰ってきたことをきっかけに、昔からどこか木に関わる仕事に携われないかなと思ってきたんですけれども、その憧れを実現するために今の森田建設緑化に就職をしました。

経験がまだ浅く、まだまだ勉強中です。本年で6年目になります。よろしくお願いいたします。



門平氏

福永

では、弊社の活動について説明させていただきます。

弊社では、主に土木部門、造園部門、林業・伐採部門に分かれており、私たちは造園部門と林業・伐採部門に携わっています。パワーポイントの左側、造園部門では、主に春から秋にかけて芝張り工事や植栽工事、公共・民間の樹木の手入れや管理・草刈りなどを行っており、右側、林業・伐採部門では年間を通して関東圏内や関東圏周辺の伐採や特殊伐採、冬場には間伐・切り出しを行っています。

弊社では、自然への還元・感謝・共存を常に抱き、100年続く森をつくり伝えることをモットーにしております。森林を破壊する伐採ではなく、持続性あるエコサイクルに沿った伐採と育成により生産された木材を提供しています。その伐採や間伐で発生した材を、薪や炭の製造、デッキ材の用材として活用し、販売・利用しています。西吾野駅にある喜多川キャンピングベースのウッドデッキは、ほとんどがその用材で作られています。

そして、これらや他資金によって苗木を調達し、山を育てまた伐採につなげていく、山と街をつなげるサイクルを確立させることがこれからの課題と思っています。

また、最近ではICT技術を活用したアプリケーションやソフトを導入し、生産性分析や本数の把握による林内管理の簡略化を図り、誰でも分かりやすく管理しやすい山づくりを進めています。ほかにも、公共施設内の樹木を調査・診断することで、樹種の統計やナラ枯れ、松枯れなどの樹木の被害を把握することができ、効率的な治療や危険木の特定を行い、林内の見える化を進めています。

以上です。

平井

皆様、どうもありがとうございました。

さて、本日のパネルディスカッションのテーマですけれども、パネリストの皆様と一緒に考え、「サステナブルな林業って何なん」というテーマとさせていただきます。サステナブルというワード、最近よく耳にしますよね。今日も、もしかすると胸にカラフルなバッジをつけていらっしゃる方、いらっしゃるのではないのでしょうか。

そうですね、SDGs、これもサステナブルという言葉

が最初についていると思います。デベロップメント・ゴールズということで、2030年までに達成すべき持続可能な開発目標ということになっています。なので、サステナブルはすごく重要なテーマであるっていうことですね。

何なんっていうのは、この地方の方言です。何なのとか、そういう意味でいいですか。そういう意味で使わせていただきました。ちょっとかわいい感じもするんでね。

というわけで、本日はサステナブルな林業について、ここにいらっしゃる皆様と共にディスカッションしていきたいと思います。

さて、サステナブルな林業といったときに、大きく3つの要素に分けられるのかなと思っています。

1つ目は、林業を取り巻く環境の持続可能性ということ。例えば適切な森林管理であったり、生物多様性の保護だったり、あと水質とか土壌の維持ですとか、あと気候変動が大きな問題ですね。

2つ目としては、経済的な持続可能性だと思います。例えば、こちらの皆さんもおっしゃっていたことかと思うんですけども、木材生産の効率化の話ですとか市場価値の向上のためにどうしていくべきか、収益の安定化、雇用創出のためにどうするか、地域資源の活用と経済活動との融合をどうしていくかですとか、持続可能なビジネスモデルをどのように構築していくのかというようなことかと思います。

そして3つ目、社会とか文化的な側面だと思っています。例えば、林業に関する教育の話ですとか、伝統的な森林活用と新しい技術の融合も皆さんもお話ししていただいたことかと思います。そして、労働環境の改善ですとか、あと地域のコミュニティとの連携とか協力とか、このようなことかと思っています。

これらの3つの要素がバランスよく機能することで、林業の持続可能性が確保されていくのだと思います。ただ、今回、この短い時間で全てを網羅することはできませんので、本日はこの3つ目の側面、林業の教育ですとか労働環境、地域との連携などを考えながら、林業の持続可能性について考えていきたいと思っています。

ということで、まず高橋さん、これまで林業の後継者に対してものすごくご尽力をされてきていると思うんですけども、林業での教育の体制とか、そういう

ことだと思うことってどんなことでしょうか。

高橋

私は、林業の定着のことについて話したいと思います。

私は第2次産業、第3次産業から、第1次産業、林業に参入しました。私が思う林業が定着しにくい一番の原因、ちょっと厳しいことを言うようなんですけど、常識のギャップと曖昧な指導です。林業の世界では当たり前のことが、一般から見ると特殊なことに感じるんです。ところが、現場ではそれを説明する文化がない。なぜやるのか分からないまま、体で覚えろになっちゃうんですね。また、こうやってああやってといった曖昧な教え方が多くて、具体的な数字や理由が伝わらない。だから新人は自信が持てずに、結果的には長続きしないということにつながるんですね。

それなので、私は学校でもしっかりとした数字を出して教える、なぜこれが必要なのかを徹底的に教えるということを繰り返し繰り返しやっています。

平井

ありがとうございます。

結構手厳しいご意見だとは思うんですけども、若い人はそうですね、エビデンスがないとなかなか分からないっていうのがあるのかなと思います。

門平さん、森林組合にも若い人材が入ってくると思うんですけども、教育というところで難しさみたいなところはありますか。

門平

令和に入って、10代・20代の入社社員は14人いました。しかし、1年もたないうちに半分以上が辞めてしまっている状況です。

先ほどの高橋さんの話ではないんですけども、昔はやはり背中を見て育てたんですけど、今の若い子は結構細かいことを何回も何回も言ってあげないとなかなかできなくて、また分からないことを分からないままにしまっているの、分からないことを分からないとはっきり言えるような環境をつくっていききたいなと思っています。

平井

ありがとうございます。結構な割合で辞めちゃうんですね。

これって、やはり全国的な問題なんですかね。大きな課題かなと思うんですけども、どうでしょう、民間のところでは小池さんなんかのところはどんな感じですか。

小池

当社に関しても、なかなか定着というのは確かに課題ではあると思います。ただ、嘆いていてもしょうがないので、我々ができることをやろうと思っています。特に林業職の正社員化を進めているのは、やはり林業を個人事業主でやったりするというのは非常に厳しい時代だと思いますので、福利厚生をしっかりと安定した仕事を常に、毎日あげることがとても大事だと思っています。

あとは、世間一般的に、今、当たり前になってきている週休2日。私たちも完全な週休2日ではないんですけども年間115日の休日をできるようにしていますし、指定有休制度なども利用しながら、年間115日プラス5で120日が守れるように努力しています。ほかには独身寮の制度も、20代のうちは秩父地域外から引っ越してきた方にご用意をしてあげたり、あと育児・産休などもやはり手厚く用意をしていくというのが必要なと感じています。

とある地域で聞いた話なんですけれども、せっかくその地域に移住をしてきてとある林業事業体に入りたいという話があったんですが、では林業事業体に入ったら月収幾らですかという話で、手取りで11万ぐらいかなと言われたっていうお話も聞きましたので、そういった方が20代・30代でとてもやりたいと思える仕事になっていないと思うので、そういったことがないようにしていきたいなと思います。

平井

そうですか。結構、厳しい感じですよ。でも、その中で林業もサラリーマン化していくっていうのかな。そういう流れになっているのかなって思います。

労働環境の問題がやはりあるのかなっていう気はするんですけども、どうでしょう、若者視点でこれまでの経緯なんかも含めつつ、若林さん、いかがでしょうか。

若林

自分の話をちょっとさせていただこうかなと思ってはいたんですけども、私も一般企業に入って、その後辞めて森林組合というところに入ったんですけども、確かに入ったときにあれって思うことは結構あったんですよ。こうすればいいのについていうのは、やはり思うことはありました。

そこが積み重なってしまうっていう部分は結構あったなと思うし、逆に、だからそれをそのまま継続し



若林 氏

て、そこでやっていって改善するっていうのも1つの手だなと思ったんですけども。それよりは1回外に出て、自分の足でやってみて経験を積んで、それが若い人たちに還元できればいいなと今は思っています。

なかなか、こうすればいいのにああすればいいのについていうのは、多分外から来たから感じるんでしょうけれども、中から見た人間だとそう言われてもやはりそれはちょっと難しいよなっていうのもあって、その辺が難しさだなって感じています。答えになっていないかもしれないですけど。

平井

私も大学でいて、森林文化っていう授業を持っていたりするんですけど、その中でやはり関心を持つ子がすごくいるんですよね。俺、絶対森林系の仕事に行くって言って行った子が何人かいるんですけども、先ほど門平さんもおっしゃってましたが、半分ぐらいが1週間で辞めて帰ってきてしまうみたいなの。森林だけでなく、農業とかそっちのほうで行って、うまい牛乳を作るんだって言って1週間、あの子は1か月かな、そのくらいで戻ってきているとか。

でも、やはり意識高い系の子が行っていますよね。そう思いませんか。

若林

そうですね。だから、その最初から行く方とやはりほかの業界から入ってくる方とで、その意識のレベルっていうのはちょっと違うかなっていうのは感じますけどね。

平井

門平さん、辞めちゃった子っていうのはどのぐらい頑張っていたんですか。

門平

大体、辞めていった子は3年はもたないです。

平井

やはり石の上にも、なんですね。

女性の視点から見てどうなんですかね。教育から少しずれてはいますが、職場環境っていう意味で、今お腹に赤ちゃんがいるっていうところもあって、その辺をちょっとお聞かせいただけたらと思うんですけども。

福永

私も結構、どちらかというと、一応森林資源科学科っていう林業系の大学を出て、いろいろあって森田建設緑化に就職したんですけども、普通に入ってきた時点でももちろんやる気もありますし、独り身だったのでちょっと土日祝完全休みじゃなくても頑張れる気持ちと体力と気力はあったんですけど、結婚して子供が生まれてくるとやはりちょっと子供がかわいそうっていうのが結構あって、繁忙期になると弊社も土曜の休みが少なくなったりもするので、その分子供を見ている時間、主人に任せきりになってしまうという点があって。やはり、長く続かない理由って一番休みが大きいと思うんですよ。

うちの主人も前に勤めていた会社は休日が安定しなかったもので、給料が下がっても休みが多いほうがいいって言って飯能市のちふれに就職したんですけど、そのぐらい今の人たちって給料よりも休みを取る傾向にあると思うんですね。なので、そこをまず確立させないと魅力的以前の問題で、休みが取れて当たり前の中になくなってきつつあるので、そこがやはりこれからの林業とか第1次産業の課題なのかなとは思いますがね。

平井

吉野さんも、いかがでしょう。女性目線で言われると。

吉野

女性目線でっていう話になりますと、やはり私もこの森田に就職する前に何社か面接には行っていて、やはり面接に行った時点で、面接に行かずとも電話した時点ですとか、もう女性だからっていうことで、やはり言葉にはしませんけれどもそもそも面接をする気がないんですとか。もちろん、そういう業界なので特殊な例だと思うんですけど。

ただ、私も全然関係ない業種から来て、まさか自分



吉野氏

が林業をやるなんて思っただけなんですけれども、それでも今、5年たち少しは力になれるような仕事ができるようになってきたところで、そういった面でもし人材を確保したいっていうのであれば、そもそものその雇う側がちょっと意識を変えてもらえば、多分、私のように力はないけれども木に関わる仕事をしたいって思っている方って実はたくさんいらっしゃると思うんですけど、なかなかその突破口がないっていうのは大きいと思います。

森田はやはりホームページに女性募集ってはっきり書いてあったんで、行く前からちょっと心強かったっていうのはありますね。

平井

森田さんのところもそうですけれどもいろいろなところでICTということで進んできてはいるので、そういった意味では女性でも入りやすい環境は徐々に整ってきているのかなと思いますけれども。

その辺、門平さんなんかはどうですか。

門平

まだまだ、ICTって言っていますけれども、実際の山は厳しいのが現状だと思います。うちも女性現場職員が1人いますけれども、その方は今1年もってまだ頑張ってもらっていますので。

なかなか、やはり山というのは女性には厳しいんじゃないかなという実感はあります。

平井

使いにくいんですね。

門平

使いにくいじゃなくて、体力的に結構厳しい面が出てくると思うんですよ。やはり、秩父の山ってめちゃ

めちゃ急なので。

平井

そうですね。こういうところにいっぱい植わっちゃっていますからね。

小池さんなんか、どうですか。女性を雇うというところでは。

小池

女性の方は、ぜひ採用したいです。特に、弊社で今一番足りない人材というのが、意外と木を切りたいとか伐採作業をしたい、木を植えたいという、作業をしたいという人材は意外といらっしゃるんですけど、それを管理していく、作業班をまとめて補助金をいただく際の書類をまとめる山林のほうの管理業務をやる人材がいないです。そういったところに、ぜひ女性で、先ほどおっしゃっていたおりに、力はないけれども木に携わりたいという方にぜひ入っていただきたいです。

ただ、一方で、作業班となってくるとやはり厳しくなってくるのが、作業班でもし女性が入ったらどうっていう話を聞いたことがあったんですけど、では着替えのときってどうするの。お手洗って、ではどうするの。我々林業というのは、一般の土木の仕事や建設業とは違って、仮設の事務所だったり仮設のトイレっていうのは通常ない。土木や建設業からすると、あり得ないような状況です。

林業がやはりインフラ整備として認められて、そうすると女性も入り込みやすいような体制が整ってくるんじゃないかなと思います。

平井

やはりこういう産業って、女性をどうやって活用していくかってすごく大事ななとは思っているんですけど、教育とかされていて、高橋さん、どうでしょう。女性が結構来ているなっていう感じはありますか。

高橋

埼玉県林業技術者育成研修は、12名が定員です。毎年2人ないし3人の女性が、研修生として入ってきます。やはり最初は体力的に難しいところもありますけれども、しっかり教えることによって、最初は全然チェーンソーのスターターを引けない子が、ちゃんと引けるようになってしっかりできるようになる。

また林業というのは、林業経営から測量、またうちなんかはチェーンソーの分解、組立てですね、伐倒もやります。範囲がすごく広いわけですね。その中で、

一番自分に合ったものを選択して就職してもらえれば一番いいと考えています。

平井

一定の割合で、女性が入ってきているっていう感じなんですね。

高橋

はい。あとは定期的な、月に1回、うちは刈払いとチェーンソーの特別教育をやっています。大体、チェーンソーの特別教育も12名が応募なんですけれど、その中でやはり2〜3名は女性が入ってきます。

平井

そうですね。では本当に、うまくやっていければというところですね。

女性がどんどん入っていける場になれるっていうのは、福永さん、どういうふうにやったらいいのかな。

福永

私が森田に入ったときは、もちろん女性なんていると思っていないしもちろんいなかったですし、特にちょっと特殊と言ったらいいのか分かんないんですけど、私の兄も2人いるんですけど男兄弟と育っていて、親戚も結構男性が多くて、結構、あまり男性の場に入って仕事することへの壁みたいなものが少なかったのはあるんですよね。

逆に、女性が入ってきて、私の掲載した文章を見て吉野が入ってきてくれたので、1人入ってしまえば結構入ってくるのではないかなというのはあって、今はもう1人いて3人で女性チームとしてチームで活動しているので、一人突破口がいれば結構とんとん入ってきてくれる。吉野に聞くと、私のいるっていう現状があったから入ってこられたという話も聞いているので、1人入れるのを、もちろん作業員じゃなくても、例えば先ほど小池さんが言ったようにまとめている人として女性がいうっていうのでも全然入りやすい環境はつくれるのかなと思うので、まず1人雇ってみるっていうところから始めたほうがその後の、結構とんとんと続いていくのではないかなって思います。

平井

吉野さん、やはり心強かったですか。

吉野

まあそうですね。そもそも、男性の職業に入る気はもととなかったのです。ただ、興味がある仕事がそっちだったというところから入ってしまったんですけども。

ただ、どうしてもこの業種で、トイレ事情にしろ着替え事情にしろ、まあ私たちはあまり気にしないタイプなんで今までやってきていますけれども、今の若い方の中にも、多分割合は少なくとも、私たちみたいにちょっと男性っぽい考えの女性っていうのは必ずいると思うんですよ。なんで、汚いとか3Kって言われる仕事ではありますが、私たちみたいに、そこをどうにかするっていうのはすごく難しいことだと思うので。やりたいっていう女性がいるのであれば、とりあえずやってみたらっていうぐらいの気持ちで受け入れるっていうことも大事だと思いますね。

平井

今どきは、大学にいて思うんですけど、本当に潔癖志向の子が多いなって思いませんか。男子なんかでも、スポーツ科学部なんて汗かくのが嫌みたいで拭いて回っているし、トイレなんか汚いと嫌です、みたいな感じで言っているんですよね。「そこは汚いので行けません」みたいな感じで。女子よりも、もしかすると男子のほうがね、最近そうなのかなって。

若林さん、そんなことはないですか。

若林

いや、私も嫌です。でも、山の中で普通にちょっと用を足したりっていうのは、どうしてもしちゃいますけれど。それが、だから関係なくなってきたのではないですかね。男性でも女性でも、山の中でできる人はできちゃうっていうか。ちょっと汚い話になっちゃいますけれど。

その辺は、若い人も多分、できる人もいるしできない人もいるしっていう。受けられる人もいるし受けられない人もいるしって、結構極端になってきているのではないかなって気はしますけれど。

平井

ありがとうございます。やはり林業に関心を持つ人間をどんどんつくっていかなければ、多分先細りになってしまうっていうのはあると思うんですよ。林業にこうやって人が、そうじゃなければ林業に関心を持ってもらって面白いなって思ってもらわなきゃいけないんですけど、そういう人材をこうやって集めるっていうことをしなければいけない、持続可能になるためにはそうしなければいけないんですけど、やはりそういう場合にどんなことが必要だと思いますか。

平井

高橋さん、林業を持続可能にするためには、やはり呼び込まなきゃいけないという部分もあるではないですか。それで何か取り込めることって、何かありますか。

高橋

やはり、林業って結構、その場その場の仕事が多いですよ。やはり長期ビジョンというのをしっかりと、働く人もしっかりと。何かやらされているだけで、助成金をもらっても補助金をもらっても、その年その年の終わりが多いので。もっと長期ビジョンを加えて、就職してからその会社をよくしようという気持ちをやはり持つていくように会社はしないといけないかなと思います。

小池

先生のご質問の中で、学生さんに見つけてもらうとか若い人たちに見つけてもらうということが大事だったなと思うんですけども、私たちも昨年から就活サイト、学生さんの就活サイトの職業紹介サイトに登録しました。職業紹介サイトに登録したところ、やはり弊社を見つけてくれてUターンやIターンで3人の子たちが弊社に入ることになりまして、本日の林業後継者大会でもお手伝いをさせていただいているんですけども。

ただ、職業紹介サイトって登録して運用するのに数百万円かかりたりするんですよ。そういうふうに、今の就活状況においては当たり前のインフラとされているんですけども、それを林業事業体に、職業紹介サイトに登録してねっていうのは非常に厳しいことだなと思います。

でも、その中でヒントになってくるのが、やはりSNS、無料でやれるものでしたらダイレクトに入れるのではないかなと思うので、弊社はまだ全然やれていないんですけど、そういったところから取り組んでみたいと思います。

平井

相当かかっちゃいますよね。だから、小規模でやっているところは無理ですよ。

小池

無理ですね。

平井

職業紹介サイトさんは大儲けしているんでしょう

ね。すいません、余計なことを言いました。

でも、何か林業系でそういうのを立ち上げてもらうって、林野庁を中心とか、そういうのもありなのかな。またこれもちょっとむちゃ振りしています。何か、そんなことがちょっとできたりするのかななんて思ったりもするんですけどね。

若林さんはどうですか。

若林

若い人を集めるにはどうしたらっていうところですよ。でも、難しいなと思います。

平井

でも、自分が入ってきているわけではないですか。

若林

私は何で入ってきたかっていうと、もともと木工をやりたと思っていて、木の家具とかそういうものを作りたいと思って入ったんですが、それで森の現状を知ったらすごく大変なことになっているというのを聞いて、少しでも役に立てるならやりたいなと思って。

やはり森林組合にいたときに、自分がもともと木をうまく活かしたいと思って入ってきたのに、切捨て間伐ばかりをしている現状に木をうまく活かせていないなという矛盾をすごく感じて立ち上げたんですけども、そういう意欲というか意志というか、そういうものがあつたから今何とか生きていけるっていうか、まだ立ち上げて3年ですし全然うまくはいっていないんですけども、何とかやれているかなと。

若い人たちがそこまでモチベーション高くやれていけるのかっていうのは結構あると思うんですけども、そのある一定の期間を超えてしまえば、自分の意欲をそのまま一生続けていくっていうものにできるのかなっていう。その、先ほどの門平さんの3年ではないですけども、何かある一定の期間を超えてこまに来ちゃったらこのままやっていこうって思えば続けられるのではないかなっていう気はします。だから、そういう人たちをいかに引きつけて集められるかっていうのが大事なかなっていう気がします。

平井

どうやって引きつけたらいいんですか。

若林

先ほど高橋さんがおっしゃっていたように、長期のビジョンとかそういった理想をすごくしっかりと掲げ

ておいて、その理想に対してその人たちが日々努力しているんだよっていう姿を見せられるような、それこそ SNS ではないですけども、そういった発信をしていくのが大事なんではないですかね。

という、一般的な意見になっちゃいますけれど。

平井

何か、発信なんかがんがんしていそうですね。

若林

いやいや、まだまだそんな。

平井

順番に聞いていっていいですか、門平さん。

門平

経営者の方には耳が痛いかもしれないんですけど、まずやはり賃金だと思います。山は非常に労働災害が多い現場なのに、最初の3年目ぐらいはやはり賃金が安い。ただ、本当に素人にたくさんあげるわけにはいかないんで、やはり経験を積んでもらって一人前になってきたらベースアップをどんどんしてあげるような体制が取れてくれば、山の魅力を感じて山の仕事をしてみたいなっていう人が増えてくるんじゃないかなと思っています。

平井

ありがとうございます。

学生にも、林業どう？って聞いたら、給料はいくらなんですかって言うから、日本の平均給与が460万円ぐらいで、林業は350万円ぐらい。これでは僕は生活できませんとか言っていたんですね。そう考えるとちょっと、やはり給料の問題って大きいのかなって思います。

持続可能性ということで、どうでしょう。

福永

私は皆さんと違って経営者ではないので、一社員というか個人としてなんですけれど、学生から上がって8年間やってきて言いたいのが、山で働くってすごく楽しいなっていうことをもうちょっと広く伝えられたらって思っています。

人って、面白いこととか面白そうなことに引きつけられる傾向って絶対にあるではないですか。特に若者とかはそうだと思うんですけど、先ほど言ったように3Kとかって悪いイメージしかないような林業とか第1次産業を、払拭とか新しい3Kをつくりましたとかじゃなくて、一経営者とか個人が山で面白いこと、



福永 氏

わくわくすることを何か取り入れるっていうのが一番大事だなと思っています。

弊社の社長は、よく口にするのが、飯能の山々はいつか宝箱になるんだっていう話をよくするんですよ。私、ちょっと社長とよくけんかとかして、そういう仲間なんですけれど、それは本当にそのとおりだなと思っています。埼玉県の中だったら秩父とか飯能市とか県の中の大部分を森林で占めるような地域っていうのは、本当にわくわくすることとかチャンスがたくさん残っていると思っています、それを具現化して形にできればなっていうのを、常日頃から楽しいことがやりたいなって思って過ごしています。

弊社でもキャンプ場を造ったりバーベキュー場を造ったり、また社長ももついろいろな楽しいことをやりたいっていうのに引かれて私も入ったので、そういうような楽しいことをいろいろな会社さんが丸丸となって個々でやっていって、山では楽しいことがあるんだよというようなイメージを植えつけられれば、もう少し楽しそうだなって言って若い人たちが入っていけるような、山々を宝箱にしていけるようなことを目指していけたらなと、今後は私は思っています。

平井

ありがとうございます。森田緑化さんね、本当に楽しい仕組みをすごくいっぱいつくっていて。社長、いいなと思いつつ見ているところなんです。

吉野さんは入ったときに、やはりちょっとできたらいいみたいな感じだったと思うんですけど、今、ビジョンとしてどうなんですか。先のほうが見えてきているんですかね。

吉野

そうですね、まあ仕事を辞めるつもりはないんですけども。私も入ってきたときは先ほども言ったように林業として入ったわけではないので。どちらかというと草刈りメインで初めに入っていて、気づいたら山にいたってような感じなので。

ただ、やはりこの業種は給料とかにしても何にしても、普通の会社と違うのはやはり職人ってところが大きいと思うんですね。なのでいろいろな、紙職人ですとかガラス細工ですとかいろいろあると思いますけれど、弟子入りするってというような時代では今なくなっていつていないですか。平井さんなんかは学校で学生といつも一緒なので、よく分かっていると思うんですけど。だから、どうしてもそういった昔の考えを、ちょっと変えなければいけない時代にもうなってしまうっていうところだと思うんですね。

なので、これから先、本当に木を切るにしてもいろいろ新しい技術なんかも今出てきていますけれども、どうして人が今でも切っているのかといえば、やはり機械が入れないところもちろんありますし、あとどうしたって機械で切ったら切った際に芯抜けしてしまっ、それだけで木の値段がもう全然変わってきちゃうわけではないですか。そういった本当に1ミリの切り方の世界の技術を学ばうていう、そういうところに私自身は興味というか魅力を感じて、本当に難しいですけどこの先そういうものができていけたら女性としてもうれしく思います。

平井

ありがとうございます。

林業を持続可能に進めていくというところで、やはり周辺の方々との軋轢なんかも出てくる部分ってあるかと思うんですけども、その調整、例えばもともとここに貯木場がありました、でも後から入ってきた人がこうやっていて、その人たちが文句を言うみたいなことって最近よく聞きませんか。もともと神社があったのに、そこに樺の木が生えていて葉っぱがぶわっと落ち過ぎるからその木を切れみたいと言われるとか、そういうふうなことがあると思うんですけど、小池さんのところとかはそういうものはないんですか。

小池

はい、あります。弊社の貯木場の周りはずもともと桑畑が広がっていたんですけど、最近宅地化が進んで

おりまして、後から入ってきた住民に限ってやはり音がうるさい、洗濯物が汚れるというようなお話がきます。ただ、それを承知の上で入ってきたんではないのというじくじたる思いもあるんですけども、弊社が山林の林業の部門もやって製材業も続けていく上には貯木場が絶対欠かせないものになってきますので、それを維持するためにも貯木場の移転は今後考えていかなければいけないと思います。

ほかに、所有の問題になってくると、やはり埼玉県の場合は山林の所有が細かく分かれているのが一番の大きな問題になっていると思います。青森県や岡山県は、今、山林の地籍調査が80%以上終わっておりますけれど、埼玉県に至っては山林の地籍調査が33%しか終わっていないんですよ。それができていないということは、所有者も分からないということは切ることができない。切ることができないということは、植えることもできない。つまり、イコールそれは、林業をやっている人たちに仕事を与えることができないということだと思います。

なのでその所有者の問題を、ぜひ公共の皆様にご協力いただいて解決していくことが持続可能な林業にも絶対につながってくるし、これは皆さんが共通して、共感していただけることではないかなと思います。

平井

ツアーみたいなものもいろいろされていて、地域との関係の改善みたいな形でしているのかなって拝見したんですけど。

小池

そうですね、工場見学ツアーや林業のツアーを通して、今の所有者の問題であつたり、あと丸太が100本切つて100本全て住宅の柱に使えるわけではないんですよというようにお話をすると、一般の方々もなるほどそういうことかっというのを分かっていたので、工場見学、あとは山林の現場の見学というところも通して、音はうるさいんですけども、皆さんが飲む水だったり土砂災害から守っている私たちがいるよということを知っていただくように、ちょっと頑張っていきたいなと思います。

平井

地域貢献というところで、林業組合さんとか森林組合さんの、門平さんのところも何かやっていらつしやるつて。



小池 氏

門平

ええ、地元の農高の生徒を山へ連れて行って間伐体験をさせたり、うちは原木市場を持っていますのでいろいろなクイズを出したりすると、高い人で10万円とか20万円、安い人で500円とか100円、正解は1万3,000円ぐらいなんですけれどすごく差があって、生徒たちは結構面白がってやってもらっています。

平井

やはり、そういう体験をすることによって入ってくる可能性は。それは、ちょっと苦笑いされていますけれど。

門平

呼んでいるんですけど、なかなか難しいのが現状です。

平井

地域との関係みたいところで言うと、森田緑化さんなんかはどうか。

福永

弊社では地域の方々にご協力いただいて、薪とか炭の製造の手伝いをしてもらっているんで、結構皆さん協力的です。会社自体が山の中にあるというのがありますが、古くから関係を築いているので、苦情を言うような人は、いるにはいるんですけど、少ないとは思っています。社長の計らいもあって一応弊社の周りの山の所有者さんは分かっているので、その人たちとうまく連携を取りながらここを切って整備するよみたいな同意書を書いてもらったりしています。なのでそこら辺は円滑にできているのではないかなとは思っていますね。

平井

社長が、うまい感じでそこはできているっていうことですね。社長がね。社長、褒めていますよ。ありがとうございます。

どうでしょう、寄居のあの場所ですと、音とかそういうのとかで苦情とかは特にまあ、あの場所だったらないですか。

高橋

いや、全然ないです。

平井

大丈夫ですね、川沿いでもんね。

高橋

徹夜でチェーンソーを回しても、苦情は1つもありません。

平井

いいところに位置されているっていうことですね。ただ、川のあれで結構削られたとか。

高橋

そうですね。4年前の台風19号で、うちの土地が50坪ぐらい落ちてしまっただけ。悔しいのでその落ちた岩を全部細かくして、そこに岸辺を造って、今、サップの体験イベントをやっています。

平井

もう、何をしても生き残るぞという感じですね。

高橋

そうです。落ちたら、落ちた以上に上に上がらないと駄目だっていうことですね。

平井

この気持ちがすごく大事なと思いますけれども。

あっという間に時間が過ぎていっているんですけど、最後にちょっと皆さんに、そろそろまとめていきたいんですけど、皆さんに順番にお聞きしたいんですが、サステナブルな林業のために今後皆さんがこうしていくとかこうしたいとか、そういう抱負があれば聞かせていただきたいんですけども。

順番に、よろしいですか。

高橋

またちょっと外れちゃうかもしれないんですけど、これからの林業というのはただ木を切るだけの時代ではないと。人を育てて、森を未来につなぐ仕事にますます変わっていくと思います。私も、今後は技術と心の両方を伝える教育に力を入れていきます。安全教育はもちろん



高橋 氏

んですが、就職してからの定着、職場の人間関係、さらには生き方の相談まで含めて、森と人の両方を支える育成を目指してやっていきたいと思います。

小池

私は、やはり林業というのが補助事業で行っていくってことにすごく違和感を感じています。やはり、森を守ることで水源を守り、土砂災害を防ぐという意味では絶対にインフラの整備だと思っています。そういったところが認められて、インフラとしての事業として認められていくことが必要だと思いますし、また埼玉県に至っては先ほど申し上げた山林の地籍調査が全く終わっていないというところが大きな問題です。そこを解決することで継続的に林業事業者の皆さんに仕事が与えられるような仕組みをつくっていくことが自分の使命だなと思っています。

また、このサステナブルというところに関しては、我々、埼玉県の山林がある飯能であったり秩父、寄居町というのは、荒川流域の源流であるということが1つ大きいです。荒川流域に住む人は900万人から1,000万人おりますので、今、都心では多摩山材というのがよく使われていますけれども、でも都心に住んでいる荒川水系の人たちの生活を支えているのは我々であることは間違いないので、荒川流域の木材という概念を武器にして東京の人たちに埼玉県の木材を使っていくということがサステナブルな埼玉県の林業なのかなと思います。

若林

私は、先ほどの小池さんの話ともちょっと重なるのですが、やはり地籍調査が進んでいないという現状に課題を感じています。その解決には直接はつな

がらないんですけれども、山主さん自身が結構皆さん興味を失っていたりどうしたらいいかわからないっていうような方たちが多いので、林業を経営するっていう前に山主さんの意識を山に向けるっていうことをしていきたいなと思っています。

それは今持っていられっしやる方だけじゃなくて、本当はもしかしたら持てみたいと思っていられっしやる方もいるかもしれない。そういう方たちに山をつないでいくというか、リレーで渡していくようなことをお手伝いすることによって山に興味を持つ人が増えれば、結果的に林業の活性化にもつながるのではないかなと思っています、そういうことを今後やっていきたいなと思っています。

門平

人材についてなんですけれども、うちの娘は箱根駅伝がめちゃめちゃ好きなんですけれど、これから、今、山を守っている人、これから守っていく人のことを山の神と呼ばれるような人材に育てていきたいと思っています。また、数少ない林業事業体でやっていますので、人員の取り合いではないですけどそういうことはせず、上手にやっていければいいと思います。

福永

会社としての話になっちゃうんですけれども、弊社では今後、目標としては伐採して利用して、その循環である植樹と育林に力を入れていければなと思っています。地元の小学生の植林だとかそういう取組をやっているんですけれども、大規模なものはやっていないので、そこに手を出していければいいなと思っているのと、先ほど言ったんですけれど個人としては何か面白いことを始めて、会社としても個人としても林業として面白いことを発信できればなと思っているので、もしこの中で面白いことがあるよっていう人がいれば、この後ロビーにいるのでよかったら声をかけていただければなと思います。

以上です。

吉野

私はちょっと皆さんのような大規模な考えは持っていないので、自分自身の目の前のことしか言えませんが、もし今後若い子が入ってきたりした際に、どうしても年配の方とは考え方が違うと思うので、今自分自身にできるのはそういう若い子がこの業界で残っていくために、ちょうどこの中途半端な年代の私

ぐらいの者たちが間になって、古いものは古いとしてよく使って、新しい技術は新しいものに使えるものとして、お互いを一緒にできるような仲間としてやっていきたいなと思っています。

平井

ありがとうございます。

今回、サステナブルな林業って何なん、ということでお話しさせていただきました。何か、皆様の中でちょっと刺さる部分ってあったでしょうか。少しエッセンスを持って帰っていただけたらとは思っています。

ちょっと言い切れなかった部分ってないですか。最後に一言、やはりこれ言っておこうみたいなものがあれば。

高橋

今の子は今の子はってよく言うんですけど、今の子ほどしっかり納得すれば仕事ができる人間っていないですよ。本当に、教える側、管理する側は我慢ですよね。我慢して、しっかり、細かく教えてあげる。大ざっぱに教えたなら、絶対につまなくなってしまう。

それは、うちの学校でも全く同じです。納得すれば、本当によくやります。仕事を本当によくやります。

以上です

平井

ありがとうございます。

よく言われることですが、石積みをしている職人の話ってよく出るではないですか。最初の人に石積みをして

しているのは何のためって言ったら、僕は石積みをしています。次の人に聞いたら、僕は教会を造っています。次の人に聞いたら、みんなが祈る場所を造っています。その意識なんですね。石を積んでいるだけだと、分からない部分というのがある。

林業というものがその先を見据えたものにつながっているんだよって、いい日本に、持続可能な林業とか日本につながっているんだよってところが明確化できれば、何かすごくいいのかなって。先をちゃんと見せてあげるということが重要なのかなと思います。

あつという間にお時間になりました。パネルディスカッションは、以上で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

司会

どうもありがとうございました。木材であったり山林であったり、私たちのすぐ身近なところにあるものなんですけれども、それが手に届くところにあるので、当たり前過ぎてそれを守り持続させていく方々のご苦勞に思い至らない。まずは興味を持つことからという言葉が、とても刺さりました。ありがとうございました。

ご登壇いただいている皆様に、今一度盛大な拍手をお願いいたします。皆様、どうもありがとうございました。

これもちまして、パネルディスカッションを終了いたします。

第53回 全国林業後継者大会 埼玉2025

全国林業後継者大会埼玉2025

【テーマ】
持続可能(サステナブル)な林業って何なん?

【コーディネーター】 駿河台大学 副学長/一般社団法人里山くら保 代表理事
平井 純子氏

【パネリスト】 株式会社FOREST COLLEGE 代表取締役 高橋 昭夫氏
株式会社ウッドアイコイネ 常務取締役 小池 啓友氏
合同会社西川Rafter 代表社員 若林 知伸氏
秋田広域森林組合森づくり推進第二課長 門平 宗久氏
森・木材セクター所長 福永 肇氏
株式会社森田建設 経営企画部 吉野 一恵氏

閉会式典

大会宣言

本日、私たちは、埼玉県飯能市に集い、「森が支える日本の未来 私たちの手で作り出そう」をテーマに、森づくりの重要性や、林業後継者を育てるための課題と対策、持続可能（サステナブル）な林業への思いを語り合いました。

森林は、水源のかん養や、山地災害・地球温暖化の防止、木材の生産、生物多様性の保全など、私たちの暮らしを支えている社会全体の大切な財産です。

そして日本の森の多くは、その時代の林業を担う人々によって、様々な技法を用い、植えて、育て、利用されてきました。

日本の未来は、この森林の循環利用を進めながら、大切な森づくりを担う人々を、今の世代から将来の世代に渡ってつないでいくことにかかっています。

そのためには、林業という仕事が、希望や誇りをもって働き続けられる魅力のある職業となるよう、私たちが導いていかななくてはなりません。

私たちは、日本の未来のため、林業後継者の育成を図り、次の世代へと引き継ぐ取り組みを進め、私たち自身の手で健全な森を育て、豊かな社会を築いていくことを宣言します。

令和7年5月24日

第53回全国林業後継者大会



埼玉県立秩父農工科学高等学校 森林科学科

いくとみ ゆうのすけ ぬまざわ すず
生富 勇乃介氏 沼澤 涼氏

次期開催県あいさつ



第 54 回全国林業後継者大会
愛媛県実行委員会会長
菊池 俊一郎 氏

只今、ご紹介頂きました、第 54 回全国林業後継者大会愛媛県実行委員会会長の菊池でございます。次期開催県を代表してご挨拶申し上げます。

この度は、埼玉県での第 53 回全国林業後継者大会の開催に当たり、準備・運営にご尽力されました、埼玉県森林協会、埼玉県及び飯能市の皆様、また関係者の皆様方に心より敬意と感謝を申し上げます。

来年は、愛媛県で「第 76 回全国植樹祭」が執り行われ、その前日に「人と技 つなぐ^{えがお}愛顔の森・未来」を大会テーマに、愛媛県久万高原町におきまして本県初となる「第 54 回全国林業後継者大会」を開催いたします。

開催地の久万高原町は、県都、松山市から車で約 50 分の場所に位置し、西日本最高峰で日本 100 名山の石鎚山、日本三大カルストの四国カルストを有するとともに、明治初期から育林と優良材生産の久万林業地として栄えた林業と木材の町です。多くの林業関係者、森林に関心のある方、そして全国の林業研究グループの仲間にお集まりいただき、大会テーマに沿って、「人と技」が、過去から現在、そして未来へと引き継がれ、みんなが「えがお」になれるよう語り合いたいと思っております。

今回の素晴らしい、埼玉県大会を参考にさせていただき、おもてなしの心で、愛媛らしい、大会となるよう、開催準備を進めて参りますので、愛媛県久万高原町に、是非、お越しく下さい。お待ち申し上げます。

簡単では、ございますが次期開催県の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

閉会の言葉



第 53 回全国林業後継者大会
埼玉県実行委員会副会長
浅見 浩司

本日は全国各地からご参加を頂き誠にありがとうございます。

森林文化都市を宣言するここ飯能市で、このような大会が開催されましたことは誠に光栄であり、行政として林業振興を担う私としては身の引き締まる思いでもございます。

本日ご参加の皆様におかれましても、本大会の意義を改めてお考えいただき、日本の林業振興に向け、それぞれの地でますますご活躍されますことをお祈り申し上げます。

以上をもちまして、「第 53 回全国林業後継者大会」を閉会といたします。ありがとうございました。

PHOTO GALLERY

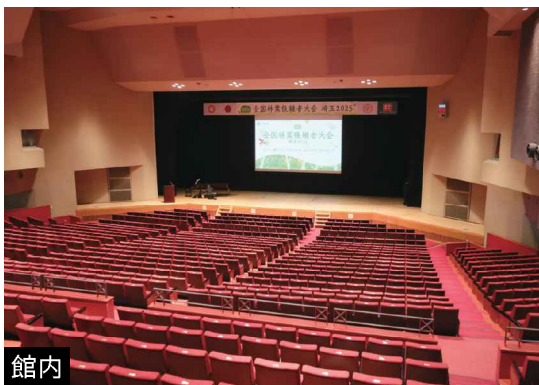
大会の様子



大会会場



大会会場入口



館内



客席



ステージ正面



送迎バス



受付



緑の募金

大会の様子



名刺交換会



展示コーナー



物販コーナー



物販コーナー

当日配布物



大会パンフレット・全国植樹祭のチラシなど



大会記念品
(カッティングボード)



全国植樹祭グッズ
(シール・しおり)



オリジナルトートバッグ



各種チラシ



協 賛

埼玉県森林組合連合会
一般社団法人埼玉県木材協会
公益社団法人埼玉県緑化推進委員会

第53回全国林業後継者大会
埼玉県実行委員会事務局
(埼玉県農林部森づくり課内)
〒330-9301 さいたま市浦和区高砂3-15-1
TEL:048-830-4325